

原爆文学研究会報

第四五号

原爆文学研究会 二〇一四年一〇月

広島・在日・被爆者 広島で過ごした中学生時代、在日コリアンの「本名宣言」の場に立ち会った。体育館に全校生徒が集められ、上級生の女子が一人で舞台上がり、自らが在日であること、今日から通名ではなく本名を名乗って生きていくことを告げた。小学生の頃から在日の同級生はとも多かつたため、「本名宣言」にさほど驚いたというわけでもなかつたけれど、堂々とした彼女の立ち姿は今も目に焼き付いている。

このことを思い出したのは、数年前、峠三吉らが刊行したサークル詩誌『われらの詩』（一九四九—五三年）の復刻版刊行作業に関わったことがきっかけだった。『われらの詩』の背景を理解するために、多くの被爆体験記や研究に触れるなかで、実に恥ずかしい話なのだけれども、私をはじめ朝鮮人被爆者―なかでも今も広島で暮らす在日の被爆者―の存在を、実感をもって受け止めることになったからだ。「うちのお父さんとお母さんは広島生まれの韓国人じゃけん、うちも韓国人なんよ」と教えてくれた同級生もいたのに、父に連れられて本川橋西詰にあつた頃の韓国人原爆犠牲者慰霊碑にも行つたのに、そして「本名宣言」にも立ち会つたのに、なぜか私は在日と被爆者を結びつけて考えたことがなく、そして戦後の広島を多くの在日の人々が支えてきたことにも、当然思い至らなかつたのだ。

自分の無知があまりにも情けなく、私は国会図書館に通い、当時の『中国新聞』の記事を手がかりに、『われらの詩』が刊行されていた時期の広島朝鮮人の活動を調べはじめた。その拙い成果は、川口隆行さんが折に触れ紹介してくださっており、感謝にたえない。

今後は、北爆がはじまりベトナム戦争が泥沼化した六〇年代後半以降、

朝鮮人被爆者の問題が可視化されていった過程を勉強していきたい。私の本棚を眺めた母が「昔読んだ」と指さしたのが、私が生まれた一九七四年に出版された深川宗俊『鎮魂の海峡』だったからだ。『われらの詩』の担い手として朝鮮戦争への反戦運動に関わつた深川が『鎮魂の海峡』を著す過程、あるいは六〇年代末からベトナム戦争への反戦運動に関わつた母が『鎮魂の海峡』を手に取る過程。そのような点を社会運動史・思想史の文脈のうちに捉えなおす作業は、学生の〈叛乱〉として語られがちな近年の「六八年論」の相対化をはかる重要な手がかりになるのではないかと考えている。

(黒川伊織)

第四五回 原爆文学研究会報告

二〇一四年八月二日(土)、三日(日)に名古屋大学で第四五回研究会を開催し、一日目は三十三名、二日目は四十三名が参加しました。

初日の雨宮幸明氏の研究発表に対しては、「撮影・編集の問題もふまえて、作品の内在的な分析がもっと必要なのではないか」、「戦時下に大量に生産された文化映画の技法が戦後どのように見られるのか」、「検閲は日米双方の問題として考える必要があるのではないか」、「この映画がどのように流用されていったのか」等の質疑がありました。

柳瀬善治氏の研究発表に対しては、「いとうは「平面のサーガ」から晩年の中上をすくい上げようとしているが「平面のサーガ」という読み自体をどう評価するか」、「宮内悠介の小説をどう評価するか」、「未来の他者の声を呼び込むことがなぜ三・一一以後に必要なのか」、「チエスと



囲碁の表象をどうとらえるか」等の質疑がありました。

また会員外から西河内靖泰氏による「図書館の自由をめぐる」と題して講話がありました。

二日目は「戦後70年」連続ワークショップI、IIを行いました。

ワークショップIの質疑では、テキスト内における「占領後」の時間、先行する井伏の他作品との比較、「去勢された家長」をめぐる問題、男性・女性の関係と日本・アメリカの関係、朝鮮戦争の

記憶、被爆体験が持たない書き手の問題等について意見交換されました。ワークショップIIの質疑では、『この世界の片隅で』の出版当時の読まれ方と再読のされ方、スライド上映を行う人々にあつた「原爆の凶」巡回展の記憶、川手健の方法や読む会のやり方に関する現代的な意義、『HIROSHIMA』における重ね合わせの中で重ね合されないもの、「絶対的加害者」という問題等について意見交換されました。

◇ 研究発表1

プロキノと映画『広島・長崎における原子爆弾の影響』をつなぐもの

— 焦土の撮影とその前史をめぐる —

雨宮 幸明

本報告は、一九二九年から一九三四年まで独自の記録映画の撮影と上映を試みたプロキノ（日本プロレタリア映画同盟）の活動と、原爆投下直後の広島・長崎を撮影した映画『広島・長崎における原子爆弾の影響』との関係性を考察するものであつた。日本におけるドキュメンタリー映画の原点として現在ではプロキノの活動は認識されているが、そのプロキノの中心として活動していた映画評論家に岩崎昶がいる。日本の敗戦前後に日本映画社において彼がプロデューサー加納竜一と共に制作した映画が『広島・長崎における原子爆弾の影響』であつた。加納竜一もまた映画評論家として一九二〇年代から雑誌『映画随筆』等の編集として活動し、文化映画の制作者ともなつた人物である。

本報告では、プロキノ解散に至るプロレタリア文化運動の弾圧から、映画法制定による文化映画の興隆を経て、岩崎昶と加納竜一が『広島・長崎における原子爆弾の影響』制作に合流する経緯までを各種の映像資料をもとに説明した。だが、今回の報告ではプロキノの映画制作における経験と、文化映画における戦時協力の問題、原爆映画制作における岩崎・加納の参与との位置づけが理論的に十分に検証できず不十分な報告となつた。会場からは、当時大量に制作された文化映画の影響において正しい分析がなされていないとの指摘もあり、今後の研究において重要な課題をいただいた。今後の研究においては、いただいた指摘をもとに一九二〇年代からのプロキノの映画制作における経験や人物の交流が、

戦時中の文化映画、戦後の原爆映画制作などと、どのようなつながりをもっていたのかをより深く検証する作業を行いたい。

◇ 研究発表2

三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3

——現代小説を題材に「核」と「内戦」について考える——

柳瀬 善治

本発表では以下の点について報告した。

まず、いとうせいこうの中上健次論「平面のサーガ」を読解し、いとうが中上から継承したものを、「時間性を捨象した、平面的分裂としての物語の記述可能性」としてとらえた。ついで、いとうせいこうのデュシャン論「Snote」を、中上の「平面のサーガ」を展開したものであり、いとうの現代小説論——「時間と空間の無限の分裂」を「同時的な観想」として表象すること——として位置づけた。さらに、G・ドウルーズの「フーコー論を補助線として」、「平面のサーガ」の問題を「場所を持たない物語」「可視性なき言表」の記述可能性の問題として捉え直した。

こうした理論的補助線のもとに、いとうせいこうの『去勢訓練』をセザンヌ・デュシャン・ベーコンの芸術的な課題を同時に解こうとしたものとして読解し、さらに晩年の中上の作品をいとうせいこうの側から逆算してとらえ、その「(表象の)失調の徹底」と「内戦の予兆」、そして記述する「私」の「空白」を指摘した。

いとうの『想像ラジオ』の戦略を、書かれなかった「空白」に暴力的な記憶が充填されるテキストとして捉え直したうえで、宮内悠介の作品を取り上げ、彼の小説に書かれたゲームが内戦の時代を生きる芸術家の課題(過去・

現在・未来の死者の声を同時に小説平面で描こうとすること)の謂いであることを述べ、そこにある「未来への希望」について述べた。そして、いとうの『存在しない小説』について、それが『想像ラジオ』で描けなかった「未来の他者の声」と「内戦の暴力」を描こうとしたものだとした。最後に、古川日出男の『馬たちよ、それでも光は無垢で』が、いとうや宮内と同様の問題意識に貫かれており、かつそこには平面性・空間性に還元されない垂直の次元——「罪」の次元が残存しており、その点はいとうの作品も同様だとした。

◇ 講話

図書館の自由をめぐる——『原爆と差別』事件

から「はだしのゲン」「アンネの日記」問題まで——

西河内 靖泰

たいていの図書館に貼られている『図書館の自由に関する宣言』(『自由宣言』)というポスター。これは、日本図書館協会が『自由宣言』に示された「図書館の自由」という図書館の原則の啓発・普及のためにつくったもの。「図書館の自由」のことは、有川浩『図書館戦争』や昨年の島根県松江市学校図書館での『はだしのゲン』閲覧制限問題のマスコミ報道などで知った方も多いだろう。

この『宣言』は、図書館が国民の知る自由(市民の知る権利)の保障という役割・機能を担うために、その手段として「資料収集の自由」「資料提供の自由」「利用者の秘密厳守」「すべての検閲反対」ということを、市民に対して約束したものだ。

でも、これらの原則は往々にして軽視され無視されがちだ。マスコミで図書館は話題にはなっても、「図書館の自由に関する宣言」や「図書館員の倫理綱領」ことが取り上げられることはない。事件や問題が起き話題になって、そのときに少しだけ理解してもらえ。でも、そのうち

また忘れ去られる。そして事件や問題が起きる。そんな繰り返し返しの歴史。

先の「はだしのゲン」騒動も、私たち図書館の現場にいる者にとってはそのような歴史の一コマでしかない。私たちは、この問題で松江市教委に要望書を出したりヒヤリング調査に出かけ、マスコミにもコメントを出したが、図書館の立場からいうと、結局ほとんどのマスコミ報道は「図書館の自由」について理解していただけているものとは思えなかった。

「ゲン」の擁護派も批判派も「図書館の自由」のことは軽視していた。だから、その後も全国各地で「右派」の人たちからの「排除」の動きが続き、この騒動は終わっていない。

「ゲン」騒動は、何が問題だったのか。「図書館の自由」を掲げる私たちは次のようにみている。教育委員会の問題として「利用制限措置の妥当性」「外部からの圧力問題」「図書館の役割や図書館の自由の原則への理解不足」「そもそも、何のための利用制限措置」、マスコミ報道等の問題として、「ほとんど触れられなかった図書館の自由」「不毛な「残酷」「有害」「平和教育教材」という論争。マンガという存在は「否定・排除」の歴史、学校図書館の問題として、「学校図書館への理解不足——教育委員会もマスコミも「はだしのゲン」の批判者も擁護者も、だれも理解しようとしなかった学校図書館の存在の意味と役割」など。

東京都区市立図書館での「アンネの日記」破損事件。この事件は、図書館の自由の問題というより図書館の蔵書に対する危機管理の問題だが、この事件を思想的な事件として扱う立場の人たちとそれに追隨するマスコミ報道。この事件そのものよりも事件がもたらす波及効果が「図書館の自由」の危機につながりかねなかった。図書館の自由に取り組んできて常に一部のマスコミ報道には不満と危惧を持ってきた。でも、松江のことを私たちが知ることができたのは地元紙の取材のおかげだ。ここ数年はマスコミの記者たちの取材を受けてきて、私の言ったことが理解し伝えてもらえてきていると感じてきている。これらの事件の報道を通じて、また図書館の自由を改めて考えさせてくれたように思う。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップI

原爆文学「古典」再読1

——井伏鱒二『黒い雨』報告

中野 和典

なかば読書会のような形で一つのテキストについて議論する場を設けてほしい、という声が数年前から研究会事務局に寄せられていた。このたび「戦後70年」連続ワークショップを企画するにあたり、その一回目として井伏鱒二「黒い雨」を取り上げて再読を試みることにした。これをテキストに選んだのは、これが「古典」と呼べる存在感を持ち、かつ同日のワークショップⅡとも時代的に重なるものだったからである。

まず、司会者の中野が、これまでに「黒い雨」がどのように読みつがれてきたのかを整理した。「黒い雨」を〈庶民〉〈日常〉〈素朴〉という視点から高く評価した河上徹太郎論（一九六五・一二）をはじめ、概ねそれを踏襲した山本健吉論・江藤淳論・平野謙論（いずれも一九六六・八）などの系列と、そのような評価に〈自己慰安〉を読む大江健三郎論（一九六七・五）、「黒い雨」とそれ以前の「原爆文学」との連続性を重要視する長岡弘芳論（一九七三・六）、「黒い雨」の〈小市民〉性を批判した金子博論（一九八六・三）、「グローバルな視点」の欠如を指摘した黒古一夫論（一九九三・七）、「黒い雨」の「正典」化に〈ナショナルな欲望〉を読む川口隆行論（二〇〇一・七）などを紹介した上で、「黒い雨」の時間構造を分析した松本鶴雄論（一九九〇・七）のような視点で本文を読み込むことも課題として残されていることを指摘した。

続いて、齋藤一氏と中谷いづみ氏からの発題を受けて、後半は参加者全体で討論を行った。討論では「黒い雨」の時間構造には矛盾があるのではないか、「さざなみ軍記」などの他作品との共通点から「黒い雨」

をどのように再評価できるか、「重松日記」と「黒い雨」における女性の描かれ方の違いをどのように考えればよいか等の問題について話合った。ワークシヨップの詳細は二〇一四年一二月に発行する「原爆文学研究」第一三号に掲載する予定なのでご期待いただきたい。

◇「戦後70年」連続ワークシヨップI

原爆文学「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』

奇妙な？「士気称揚」——『黒い雨』と『重松日記』

齋藤 一

近年の私は、アジア・太平洋戦争後の日本において、英米文学研究者がアメリカ合衆国の文学や文化にどのように取り組んだのかを検討している。今回のワークシヨップでは、井伏の『黒い雨』と閑間重松『重松日記』を比較しつつ、井伏（や閑間）がどのように「アメリカ」の問題を扱ったかについて探ってみた。

まず、『黒い雨』も『重松日記』も、アメリカ軍が原子爆弾を広島市に投下して悲惨な被害をもたらしたことへの言及は少ない。前者には、新型爆弾の広島への投下を伝える大本営発表と、原子爆弾がもたらした惨禍を批判した天皇の詔勅の引用がある程度である。後者には「それに、誰も敵米国のことを云わなかった。（中略）僕も敵米国に対する恨みなど、とんと忘れていた。（中略）此の心境は僕だけでもない。広島市民のほとんどが同じだという」（二二五頁）といった記述もある。アメリカ軍の原子爆弾投下について直接の言及を避けるといふ点において、どちらのテクストも、例えば（これも「古典」といって差し支えないだろう）ジョン・ハーシー『ヒロシマ』との比較は可能かもしれない。

もう一点、『重松日記』には、閑間が工員に対して「士気高揚」の演説をするシーンがあることに注目したい。この演説は英米の女性たち（第

一次大戦中、病の息子を犠牲にしてドイツの潜水艦の発見を通報したローレンソン夫人と、ハリエット・ストウ『アンクル・トムの小屋』の登場人物で、決死の川渡りを敢行したエルザ）に言及し、広島市の復興に邁進することを訴えるものであった。閑間は、敵として戦っているアメリカやイギリスの文学や文化に詳しい人物であったのである。興味深いのは、このいささか奇妙な「士気高揚」演説は、『黒い雨』では完全に削除されているということである。「古典」になった『黒い雨』においては、英米文化に親しい雄弁な静間ではなく、私たちが知るところの寡黙な重松という人物が必要だったということであろうか。

◇「戦後70年」連続ワークシヨップI

原爆文学「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』

「黒い雨」とベトナム戦争

中谷 いずみ

今回の報告で私が試みたのは、「黒い雨」という作品を、発表された時代に置き直して再読することだった。膨大な先行研究が明らかにしてきた作家の作品系列や原爆文学の系譜などの通時性を追うのではなく、雑誌に連載され単行本として刊行された一九六五年前後に再配置し、共時的に読むことで、作品が時代と切り結ぶさまを浮かびあがせたいと考えたのである。なぜなら、「黒い雨」の連載が始まった一九六五年は、アメリカが北ベトナムの爆撃を開始した年でもあり、同時に日韓基本条約が調印された年でもあるからだ。そのような時代の中で、テクストは戦争を、そして原爆被害をどのように描いたのだろうか。

先行研究の指摘通り「黒い雨」にはさまざまな儀式や慣習、共同体主義や家長の立場の強調などが描き込まれているのだが、興味深いことに、それらは上／下という関係に結びつけられている。主人公である重松は、

「上」の横暴に翻弄され苦しめられる「下」（「庶民」）の立場の者として表象されており、これは当時のベトナム戦争ルポルタージュで語られる「農民」の表象に近接的でもある。ベトナム戦争期に、この「農民」のような受動的かつ非イデオロギー的存在への同情や共感を梃子とする反戦言説が流布していたことを踏まえれば、「下」の苦しみを描いた「黒い雨」が「反戦」的作品として受容された文脈も理解できよう。だが一方で、その「反戦」言説に内包された非イデオロギー的主体へのまなざしを過去の戦争や原爆被害に向けたことで、「戦争」に関わる記憶や認識の再編にテキストが関与してしまった可能性もまた否めないのである。

現在進行形で激化していくベトナム戦争と、外交上とはいえ、経済路線によって曖昧にされていく植民地支配の責任とが交差する地点で書かれた「黒い雨」には、反戦言説におけるまなざしと過去の記憶の編成とが幾重にも織り込まれている。今回の報告ではそこまで論じきれなかったが、今後、再読という行為を通してあらためて考えてみたい。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅡ

原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に

被爆体験を〈書く〉

——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に——

キアラ コマストリ

被爆二十年にあたる一九六五年には、被爆体験に関わる数多くの書物が刊行されているが、山代巴編『この世界の片隅で』（岩波新書）は、とりわけ重要な一冊である。同書では、いわゆる原爆スラムや被差別部落に暮らす人々、原爆孤児や沖繩の被爆者など、当時顧みられることの少なかった人々の「この世界の片隅で」の営みが主題となつてい

ある。ただし、この書物を適切に位置づけるためには、一九五三年に山代巴が川手健らとまとめた被爆者の手記集『原爆に生きて』（三二書房）からの流れを踏まえる必要がある。同書においては、被爆者を直接訪問して関係を築きながら言葉を持たない被爆者から言葉を引き出す、という〈表現〉の方法と、そうすることによって被爆者の組織化を進めていく、という〈運動〉の方法が、一体となつていたが、『この世界の片隅で』においても、〈表現〉と〈運動〉をめぐつてかつて実践されたそのような方法が強く意識されていたからである。

しかしながら、『この世界の片隅で』において『原爆に生きて』の方法がそのまま繰り返されているわけではない。なぜなら、被爆者運動がすでに大きな流れとなつていた一九六五年の時点では、被爆者が声をあげることが困難であつた一九五三年の時点とは、外在的条件が大きく異なつていたからである。そこで、山代巴らは、一九六五年の時点でもなお声をあげることのできない人々のうちに入り込み、彼らを主題とするルポルタージュを書くという方法をとつた。かつて『原爆に生きて』で試みられた方法が強く意識されていたからこそ、新たな状況のもとで、ルポルタージュという方法が採用されることになつたのである。この新たな〈表現〉は、きのこ会という新たな〈運動〉を生み出すきっかけともなつた。このように、『この世界の片隅で』という六〇年代の〈表現／運動〉は、『原爆に生きて』という五〇年代の遺産の継承と転回のうちに、生まれてきたのであつた。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅡ

原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に

「原爆文献を読む会」とは何だったのか

小沢 節子

「原爆文献を読む会」は、『朝日ジャーナル』一九六八年六月二日号読者欄での長岡弘芳の呼びかけに応えて集まった人びとによって始められた。長岡と中島竜美を中心に、学生、会社員、看護師、教員など三人前後が月に一度集まり、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、山代巴編『この世界の片隅で』を手にはじめに読書会をおこなった。活動の概要は、会報（八号・七一年二月まで発行）及び、その後のタブロイド判『にんげんをかえせ』（七号・七二年一月まで発行）によって知ることができる。会は読書会にとどまらず、公開集会の開催、福島菊次郎の写真集『ある原爆被災者の記録』からのスライド制作と上映、小学館や円谷プロへの抗議活動（被爆怪獣問題）、被団協との連係など次第に外に向けての実践的な運動へ軸足を移して行った。文献を読むことの重要性を強調する長岡は七一年末頃に会を離れたが、中島を中心にした創立当初からのメンバー数人は、被団協の援護法制定運動や、その基盤となる被爆者の生活実態調査への協力など七六年頃まで活動をつづけた。

従来の研究では、長岡の回想や会報に綴られた若者たちの性急な言葉から、同会は「戦中世代を糾弾し、原爆文学（体験記）を被爆者の被害者意識への自閉として批判した」「自らの内面性を問うことなく政治化・過激化した」とも位置づけられてきた。しかし、改めて会報に記録された読書会での議論や、上述のような対外的な活動、長岡が離脱した後の運動に眼を向けるならば、「読むこと」と運動との相克、原爆問題と他の反戦平和運動あるいは差別撤廃運動との関係性、被爆者と非被爆者の〈連帯〉など、様々な問題に直面しつつ模索した会員たちの姿が浮かび

上がってくる。また、長岡だけではなく、中島が当初から在韓被爆者問題について会のなかで主張をつづけたことや、笹本征男の占領期の原爆調査の研究の出発点が同会にあったことなども注目される。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅡ

原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に

「核」の連鎖・「難死」の連鎖

——小田実『HIROSHIMA』を読む——

道場 親信

報告では、小田実の小説『HIROSHIMA』について、小田の思想の柱をなす「難死」の思想と「被害者⇨加害者」連鎖という二つの系からなる議論を軸として読解を試みた。この二つの議論は相互に緊張関係にあり、そのことに注目しながら『HIROSHIMA』が実現しようとした思想的課題あるいは文学的実験の所在を確かめようというのがねらいであった。

『HIROSHIMA』には小田の思想が明確に形象化されているとまず第一に言うことができるが、それはふりかえれば『HIROSHIMA』以後に小田自身が「難死」と「被害者⇨加害者」の思想を深め自己注釈を施していった結果ということもでき、小田の思想世界を追う上でもこの作品が重要な契機をなしていることがわかる。

従来の研究では、『HIROSHIMA』について「被害者⇨加害者」連鎖の視点から読み解く作業はたとえば黒古一夫『小田実——「夕ダの人」の思想と文学』（勉誠出版、二〇〇二年）でも行われているのだが、「難死」の視点は必ずしも明確ではない。また、「難死」と「被害者⇨加害者」連鎖という二つの議論・視点の関連について掘り下げた議論もなされていない。ジョン・トリートや黒古は小田の小説のキーワードとして「全

体性」を挙げるのだが、切り取られた状況の中に「被害者」と「加害者」を発見し、それをつなぎ合わせるだけであるならば「文学」は不要であり、むしろ「社会学」の方が有効だろう。むしろ「被害者」や「加害者」の立場からは「全体」は見えない。「難死」という視点に立つことで、個々の互いに見えない（が関わっている）「難死者」の個別的な死をたどるといふ道すじが示される。『HIROSHIMA』第一部は俯瞰的な構成をとっているのに対し、第三部はこのように個性の重層という語りの形をとっている。

小田のこの作品はベトナム戦争が終結した時期から構想されていたものであり、ベ平連解散の翌年である七五年の昭和天皇訪米という出来事が作品に歴史的な刻印を残している。帰国後の記者会見で天皇は自らの戦争責任に関する質問に対し「そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないのでよくわかりません」と答え、原爆の投下については「遺憾には思っていますが、こういう戦争中であることですから、広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないことであると私は思っています」と答えた。本作品はある意味での昭和天皇の「言葉のアヤ」にこだわり、「文学方面」から責任の所在を明らかにしたものであるとも言える——原爆投下責任に関する昭和天皇と合州国の「共犯」の問題も含め。

ところで当日の報告は多岐にわたる論点を扱い、時間を大幅に超過してしまつたため、ここでは「報告要旨」としても規定字数を超えていることもあり、一気に結論へ飛ぶことにしたい。

小田がこの作品の中で求めたものは、「被害者」と「加害者」の連鎖を断ち切るということであった。小田の思想の中では二つの絶対性がせめぎ合っている。ひとつは「難死」の絶対性であり、もうひとつは「加害」と「被害」の絶対性（およびその非対称性）である。小田は「絶対的被害者」を立てておいて、そこから「加害者」を撃つ、というような新左翼的な倫理主義を好まなかつた。また小田は「難死」の絶対性とい

う観点も手放さなかつた。「虫ケラのような死」を死ぬことは、それが「加害者」であっても「あつてはならない死」なのだ。「難死者」は自らを「難死」に至らしめた加害者を告発する権利を持つ。新左翼的な倫理主義であれば、たとえ「難死者」であつたとしても、それが「加害者」であるならばその死は「やむを得ないこと」あるいは「当然の報い」となるだろう。小田はこの作品の中で、その倫理主義の磁場、そして「被害者」の立場に寄り添うことで生じる怒りに深く共振しながらも、そうした単線的な展開をしない。

この作品で採用されたのは、「難死」の絶対性を軸として——「加害」と「被害」の位置を異にする——諸主体を重層させ、「絶対的加害者」たる昭和天皇——「H」という頭文字で始まる「ジャップの政府のボス」——と合州国大統領を撃つ、という構図であつた。しかし二人を撃つ登場人物たちもまた、多様な「加害」にまみれている。ただ一人の少年だけは「絶対的被害者」の位置にいる人物ではあるが、彼の身体にも「難死」を遂げた「加害者」でもある少年たちが憑依している。彼らはヘリコプターが墜落することで共に死ぬ。という結末の、さらに結末は、それが夢であり、多様なヒバクと核被害によつて身体を侵された彼らのみが「みんな死んだ」という終わりとなっている。

この作品は小田自身政治的アジェンションとして書いたものでもないし、明確な思想的構図に基づいて設計された小説でもない。小田自身の思想の中にある葛藤を、その葛藤のエネルギーのまま書ききろうとしたとき、形象化された一つの実験作である。小田がその後もこの作品について語りつづけたのは、作品自体が作者を触発し喚起する問題性を持つていたからである。その軌跡をたどることで、小田とともにわれわれもまた重い思想的課題に何度でも直面するだろう。

ワークシヨップⅠ印象記

杉淵 洋一

大会二日目午前中に催された本ワークシヨップは、井伏鱒二の小説『黒い雨』が原爆文学の「古典」^{カナン}として定位されることを前提としながら、その作^{テクスト}品がどのようにしてその地位を獲得し、時代の経過の中でどのように評価を変容させ、他の歴史的に重要な事象とどのように比較されるかについて、三人の登壇者それぞれの視点から切り込む、たいへん趣意の明確なものであった。

司会を兼ねて登壇された中野和典氏は、『黒い雨』の受容史について精緻なご報告をなされた。特に氏が作成された先行論一覧は、調査の行き届いた秀逸な労作であり、同じく文学研究に携わるものとして頭の下がる思いをさせられた次第である。中野氏による先行研究テクストへの分析からは、『黒い雨』が、私小説の枠を止揚させルポルタージュ小説の地平を切り開いたこと、更には、それをも乗り越えて国民的記憶を喚起させる、まさに「古典」としての地位が時代の推移とともに付与されていった過程が具体的な言説とともに語られ、腑に落ちるところの多いものであった。

続く齋藤一氏は、『黒い雨』のプレテクストの一つである『重松日記』との比較から、『黒い雨』における〈土気高揚〉についての言説の欠落について言及された。また、この点をJohn HerseyがHiroshimaにおいて、米軍の行為の多くを描かなかったことの類似としても語られ、井伏の創作姿勢について、アメリカとの向き合い方の一様としての提起を試みるご報告であった。

中谷いずみ氏は、ヴェトナム戦争をめぐる主にルポルタージュの言説から『黒い雨』、延いては原爆文学との類似、同一性を子細に指摘された。とりわけ〈庶民（農民）〉の表象をとりあげられ、当該する人々の規範に対する従順さや立場の脆弱さを反戦言説に顕在化するものとしてまとめられておられた。原爆とヴェトナム戦争をめぐる言説についての類似性は、テクスト内部の類似性というよりは、そこに関わった人々の意識に

あるのではないかという私的な思いを抱きながら拝聴させていただいた。何れにしても後者二氏のご報告は、原爆文学研究の新しい展開を期待させる示唆的なものであり、これからのご研究の進展を待ちたい。

ワークシヨップⅡ印象記

李文茹

「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に」をテーマとするこのセッシヨンでは被爆体験を記録することの難しさや、非・被爆者として「被爆」関連活動に携わることの難しさ、さらに被爆という「難死」を思想化するために行われた模索などについて、興味深い議論が多く交わされた。

最も印象に残ったのは、大勢の人たちのなかに埋もれがちな被爆者たちの一人一人の顔の輪郭を描き、声を拾い、そして被爆者として送った戦後の生活の実態などを記録しようとした、60、70年代の運動家としての表現者たち・表現者としての運動家たちの模索や、それぞれが運動の中で抱えている葛藤に関する部分である。社会問題を取り上げる際、運動の手段としての文学や表象「をする」という活動自体の意味や、その影響力の射程などについての当時の文化人たちの葛藤は、今日の社会で文学・文化研究の仕事に携わっている自分にとつては、感銘を受けたところがたくさんある。

例えば、コマストリ氏のレジユメのなかで紹介されている「文学が被害者を前進させ更に多くの真実の声をあげさせる。そういったものにならなければ原爆文学の価値は半減する。」という、50年代、広島大学の学生として手記『原爆に生きて』の制作に関わった川手健の発言。また、被爆体験を表現する行為・文芸や記録を読む行為を、被爆者に関する具体的な支援運動と並べながら、文献を読む意味を問いかける「原爆文献を読む会」に関する話などがそれである。終戦してから二〇年以上が経った60、70年頃に問われた、書くことと読むことを含む「文学の価値」を、現在の観点で想像することに困難がつきまとう。しかし、戦後問題や「核」の問題が未だ

に解決されていない今日において、「原爆文学」を読むという読書行為が孕む緊張感を忘れないように、文学をしていきたいと改めて思ったのだ。

彙報

第四五回 原爆文学研究会

○日時 二〇一四年八月二日(土)、八月三日(日)

○会場 名古屋大学

○研究発表(一日目)

発表1 プロキノと映画『広島・長崎における原子爆弾の影響』を
つなぐもの——焦土の撮影とその前史をめぐって——

雨宮 幸明

発表2 三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書

その3——現代小説を題材に「核」と「内戦」について
考える——

柳瀬 善治

講話 図書館の自由をめぐる『原爆と差別』事件から「はだ

しのゲン」「アンネの日記」問題まで
西河内靖泰

○「戦後70年」連続ワークショップI(二日目)

原爆文学「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』

司会 中野 和典

発題1 奇妙な? 「土気称揚」——『黒い雨』と『重松日記』

齋藤 一

発題2 「黒い雨」とベトナム戦争

中谷いずみ

○「戦後70年」連続ワークショップII(二日目)

原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に

司会 川口 隆行

報告1 被爆体験を〈書く〉——山代巴と『原爆に生きて』の

世界の片隅で』を中心に——
キアラ・コマストリ

報告2 「原爆文献を読む会」とは何だったのか 小沢 節子
報告3 「核」の連鎖・「難死」の連鎖
——小田実『HIROSHIMA』を読む 道場 親信

編集後記

研究会で戦後七〇年の連続企画が始まり、本号も充実した誌面となりました。ご寄稿下さった皆様に感謝いたします。また会員外から印象記をお寄せいただいた杉淵洋一氏に御礼申し上げます。

今回の研究会は名古屋で開催されました。私が愛知県を訪れたのは、新幹線の通過や乗り換えなどを除けば一〇数年前になります。愛知と縁のない私が今回思い浮かべたのが、「愛・地球博」(これは愛称で、正式には二〇〇五年日本国際博覧会というそうですが)のことです。もちろん行ったことはありませんが、気になって、いま公式サイトを覗くと、メインテーマは「自然の叡智」となっています。さらに「環境への取り組み」(<http://www.expo2005.or.jp/jp/A0/A1/A1.1/index.html>)のページには、「※外国パビリオンで使用する電気に関しては、自家発電等による環境負荷を排除し、原子力発電など二酸化炭素の排出量の少ないクリーンで安全なエネルギーを使用しています。」と説明されています。これは二〇〇五年に戦後六〇年における原発言説の一例ですが、この一〇年間もまた戦後七〇年の内の時間として再検討しなければいけないと考えます。

次回研究会は二月二日、福岡市で開催します。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>